

人間の敵であるはずの鬼や幽霊が人間の味方になる日本の文化の協調性

1 「幽霊」と「妖怪」と「鬼」の違い

この季節になると、出てくるのが「怪談」ですね。遊園地などに行くと季節限定の「お化け屋敷」が設置されていたり、あるいは、町内会などにおいてもお化け屋敷を試みたり、あるいは、子供たちが行くキャンプなどで「肝試し」などということもあります。皆「お化け屋敷」を見ながら「楽しんでいる」というのが現状ではないでしょうか。

さて、本来「お化け」や「幽霊」という存在は怖いものであるはずで、人々に忌み嫌われるはずなのです。例えば中国などで「キョンシー（殭屍）」等のことを聞くと、本当に嫌な顔をされてしまいます。しかし、日本では、80年代に流行した「霊幻道士」という映画の影響もあり、「キョンシー」というと、「かわいい幽霊」というような感覚があるのです。幽霊やお化けという存在に対して、これだけ日本と他の国では違うということになるのではないのでしょうか。少なくとも「死んでいった人々の霊魂」を「夏の風物詩」として享樂の材料にしている国は少ないようです。

そもそも、「幽霊」というのは、どういう存在なのでしょう。

一応定義をしておくと「幽霊」は「人間が死んで霊魂となり、成仏できずにこの世をさまよっている状態」であるとされていますし、また「妖怪」は「物や動物などが、人間や社会に何らかの不満や恨みを残し、霊魂が形となって怪異を引き起こす存在」になったもののことを言います。この二つを合わせて「お化け」というようになっているようで、遊園地にある「お化け屋敷」には、人間の形をした幽霊と、提灯や唐傘に目がついた妖怪が仲良く同居しているというようなところが少なくありません。最近の「お化け屋敷」は非常に手が込んでいて、なかなか様々な仕掛けがあり、怖がらせながらも楽しませてくれます。日本人は、そのような「怖いけれども楽しい」というような感情があり、怖いだけ、または楽しいだけというよりは、その複雑な心理状態を楽しむ部分があるようです。

さて、ではこの「幽霊」や「妖怪」はいつからあるのでしょうか。「幽霊」などが出てくるのは、ずっと後の平安時代のことになります。実は、もともとは「鬼」しかいなかったのです。

「鬼」が一番初めて出てくるのは『日本霊異記』とされています。『日本霊異記』は、『日本国現報善悪霊異記』という日本最古の説話集を略して言うものです。この説話集は平

安時代初期に編纂されたもので、古くは雄略天皇の時代の話から奈良時代の話まで上巻に 35 話、中巻に 42 話、下巻に 39 話の計 116 話あり、その多くが畿内の話になっています。そして、仏法を広めるための説話集ですので、鬼や妖怪などの話がたくさん出ているのです。

その中で、「鬼」が「幽霊」のことを指しているのではないかというような記述も少なくありません。『日本霊異記』の中の「上巻第三話」に道場法師の「鬼退治」の話が出ています。その部分を短い文なので現代語（原文は漢文）に訳してみると

「雷に授かった子供がいた。その子が興福寺の童子になったが、その頃寺の鐘堂の童子が毎晩死ぬというような事件が起きていた。彼は、この鬼をとらえてみせようと申し出た。その後、鐘堂の近くに隠れて見ていると鬼が入ってきた。彼は鬼の髪を捕まえて引きずった。明るくなって鬼は髪を引きちぎって逃げて行った。翌日その血痕を辿って行くと、その寺の悪いやつばかりを集めて埋めた辻にたどり着いた。そこで鬼が悪い奴の霊であるということが分かった。彼はその後出家して号を道場法師とした」

このように、悪いことをして成仏しきれない、本来ならば「幽霊」が「鬼」と表現されて、人を殺していたのです。そして、その鬼を退治、今でいえば成仏させられるのは徳の高い僧侶というような構図になっています。

昔は「鬼」がすべてを表す「お化け」という単語と同じであったと考えられているのです。

2 「鬼」から徐々に分化してゆく「怨霊」「妖怪」「式神」

では「鬼」とはいったい何なのでしょう。

現在では「強い」「悪い」「怖い」「ものすごい」という意味もあり、例えば「仕事の鬼」などという、「仕事が良くできる人」というような意味で「鬼」という言葉が使われます。これは「鬼」が「強い」というイメージで、なおかつ「悪い」というイメージが抜けているということから生まれる言葉ではないでしょうか。

もともと「鬼」は「隠爾（オヌニ）」が転じた言葉が語源であるとされています。元來は姿の見えないもの、この世ならざるものであることを意味したとされているのです。そのために、「鬼」が人の中に入っている、その鬼の姿を見ることは基本的にはできないとされていて、鬼の姿は平安時代にはあまりその詳細が決まっていなかったのです。もちろん、当時は電気も街灯もありませんから、夜はかなり暗かったと思います。そのために、盗賊なども京都の市内であってもたくさんいたでしょうし、また、まだ当時は朝廷に反対する勢力も少なくなかったので、人さらいや殺人、追剥などもたくさんあったのではないかと思います。そのような「普段姿は見えない」そして「怪奇現象」につながるものが、すべて「わからない人のようなモノ」要するに「隠爾（オヌニ）」が犯人であるとしていたのです。

そのような犯罪を、当時の貴族たちは「人の仕業ではない」というように思っていました。同時にそれが人に近い形のものであるというような感覚にもなるのです。動物が襲うということになれば、それは歯型や爪痕があり、それも妖怪の類ならば、鳴き声なども聞こえた

りします。しかし、多くの犯罪は黙って、そして気が付かれないうに行われるようになるのです。そこで、徐々に「鬼」は「人に近い形をしている」というような感覚になります。その「怖いもの」に対して「仏教思想」「陰陽思想」などが組み合わさり、また陰陽道による「呪詛」の考え方が出てくることによって、徐々に「鬼」が「閻魔大王の獄卒」というような感覚になります。

このような思想で「鬼」のイメージがついてくることによって、鬼とは違うカテゴリーの化け物が必要になります。例えば平安時代でいえば「鶴（ぬえ）」です。『平家物語』や『源平盛衰記』などに登場し、サル顔、タヌキの胴体、トラの手足を持ち、尾はヘビの妖怪です。北東の寅（虎）、南東の巳（蛇）、南西の申（猿）、北西の乾（犬とイノシシ）といった干支を表す獣の合成であり四方の神に対抗する力を持つ妖怪とされています。

平安時代末期、御所・清涼殿に、毎晩のように黒煙と共に不気味な鳴き声が響き渡り、二条天皇がこれに恐怖し遂に病に罹ってしまいます。天皇に、薬や祈祷をもってしても効かず、妖怪の祟りとされたのです。側近たちはかつて源義家が弓を鳴らして怪事を止ませた前例に倣って、弓の達人である源頼政に怪物退治を命じます。頼政は先祖の源頼光より受け継いだ弓を手にして、山鳥の尾で作った尖り矢を射ると、悲鳴と共に鶴が北方に落下し、すかさず家来の猪早太が取り押さえてとどめを差したとされています。声は「鬼」のカテゴリーではありません。このようなものが出てくるので「妖怪」というようなものが必要になります。

また、陰陽師の役小角や安倍晴明が身の回りの世話をさせていたのは「式神」というものです。陰陽師がいなくなって徐々に日本では言う人がいなくなりましたが、これは通常の人間の下僕ではなく、人間離れた仕事をやり、なおかつ、呪術の手伝いも行い、そして、その存在は、一般の人にはあまり気が付かれません。江戸時代ならば「忍者」「御庭番」というような存在であると思われそうですが、当時はこれらを「式神」と言って神の使いの一つとしていました。「式神」というと、人間離れたものではありながら、人間の役に立つ、鬼や妖怪のように人間に仇を為す存在ではないとされています。

そして、もう一つは「怨霊」という存在があります。怨霊は「この世に恨みを残して死んだ人の霊」とされ、鬼とも妖怪とも異なり、「もともと人間であったものが恨みだけの塊になり人々を祟る」というような存在になっているのです。日本の三大怨霊といえば「崇徳上皇」「菅原道真」「平将門」の三人ですが、怨霊ということは非常に強く人々の印象に残ったのではないのでしょうか。

このように「隠爾（オヌニ）」という存在から、人々が徐々にその存在に対して様々な思想や概念・宗教的な考え方を付加することによって、分派することになります。

3 平安時代の怨霊と人の関係

さて、現在の「鬼」の姿といえば、頭に一本か二本角が生えていて、巻き毛の頭髪に、大きな口に牙をのぞかせ、指に鋭い爪が生え、虎の毛皮の褌やパンツを履き、表面に突起のあ

る金棒を持った大男というイメージではないでしょうか。また、肌の色によって「赤鬼」「青鬼」などと言われます。あまり「茶色」「紫色」という鬼はいません。

この鬼のイメージは、室町時代の後期、特に南蛮船がたどりついてからのこととされています。巻き毛や赤ら顔は、ポルトガルやオランダの船員が酒に酔った姿に近いと思われます。彼らにとっては「異国の土地から来た屈強な大男」と、それまで持っていた「鬼」のイメージが重なったのではないのでしょうか。

これに対して、「怨霊」は平安時代からずっと存在します。そしてその存在は、当時の人々の間に「身近な現象」として存在していたのです。

平安時代の物語として有名なのが『源氏物語』です。その中に

嘆きわび空に乱るるわが魂を 結びとどめよしたがひのつま

「嘆き悲しんで空にさまよっている私の魂を、なんとかつなぎとめておいて下さい」という和歌が書かれています。これは、源氏を慕っている六条御息所を光源氏がほうっておいた間に、正妻の葵の上が身ごもり、六条御息所の生霊が葵の上に取りついたときの歌です。この歌でわかるように、平安時代は思いが強ければ生霊が人間の身体を出てほかに取りつくと思われていました。これは、そもそも人間の身体と魂が別々に存在すると考えられており、思いが強くなると、魂を身体がとどめ置けなくなってしまうと考えられていたのです。

この考え方は、平安時代から江戸時代くらいまで一般的な考え方で、夢に好きな異性を見るということは、「相手が自分のことを思っているから、自分の夢の中に相手の魂が入り込んだ」というように考えられていました。これで有名なのが小野小町の和歌ですね。

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ 夢と知りせば覚めざらましを

「相手が自分を想ってくれていると、自分の夢に相手が現れる。けれど、もうあなたは私のことなど想っていてくれるはずはない。だから、夢にあなたが出てきたのは、私があなたのことを考えていたからなのでしょう。もし夢と知っていれば、目を覚まさなかったのに。そうすれば少なくとも夢の中では一緒にいられた」

というような内容です。この和歌は何らかの事情で会えなくなった二人が、夢の中で会える。自分が夢の中で会いに行ったというような感じになるのでしょうか。夢の中においては、かなり精神的にもまた身分からも解き放たれるということがあるのかもしれませんが。このように夢のことがあるので、「生霊」といってもそんなに怖いものとは思っていなかったようです。

もう一つ『源氏物語』から和歌を紹介しましょう。

わが身こそあらぬさまなれそれながら そらおぼれする君は君なり

「私はこんなあさましい姿になりはてしましたが、いつまでもとぼけているあなたは変わりませんね」

今度は六条御息所がすでに亡くなって、光源氏の愛妾である紫の上に取りつく時の歌です。六条御息所は、よほど光源氏のことが好きだったのでしょう。死んでも怨霊となって、光源氏の周りにいて、光源氏の好きになる女性に取りつくのです。怨霊というのは、実際に

誰かに取りついて、災いを為すという感じですが、どうも六条御息所の場合は、光源氏ではなく、その周辺の女性に取りつくようです。

日本の三代怨霊ではなくても、男女の関係などにおいて簡単に怨霊になり、そして誰かに取りつく。そのような現象が恋愛物語である『源氏物語』に、普通に出てくるというような感じになります。それだけ「日常的」に「怨霊」が信じられていたということになるのではないのでしょうか。

4 怨霊など非業の死を遂げた人が、そうならないために祀られて神になる

では、そのように「人に災いを為す」という「怨霊」や「鬼」と人間はどのように付き合っていたのでしょうか。

実は、日本人は「鬼」や「怨霊」を、自分たちの側に引き込み、そして自分たちの役に立ててしまうという文化を持っています。これは、日本には古来の宗教観から言えば「地獄と天国」というような二元論を考へておらず、「輪廻転生」のような、「循環型の死生観」を持っていたことから出てくる考え方です。人を怨むということに関しては、非常に大きな力があることすし、神や仏の守りを吹き飛ばすほどのパワーとなると、当然その力は神の領域に達しているということになります。そこで、「二元論」の場合は、悪が大きな力を持つから、それを抑えるためにより大きな力を使うか、あるいは、弱い力でも結束するというような考え方になりますが、日本のような死生観があるところでは、その力から「悪」の部分はなくして、その力を自分たちの良い方向に向かわせようと思うのです。そのためには、怨霊と戦うのではなく、怨霊の怒りを鎮めて、そしてそのパワーを戴くというような形になるのではないのでしょうか。そんなことはできるのか、と考えるでしょうが、意外と身近なところに例があります。

例えば、三大怨霊の一つ平将門を祀る神田明神は、「開運招福」と「商売繁盛」のご利益があるとされています。平将門は朝廷に反乱を起こしたということで討伐されてしまいます。しかし、その恨みは大きく、怨霊となって人々に祟りをなすのです。そこで、胴体を埋葬した場所に神社を、そして、さらされていた首が飛んできた場所に首塚をそれぞれ作ってお参りしたのです。怨霊が収まると、平将門の生前に持っていた大きな力が授かる神社として人々に親しまれるようになります。当時としては馬や商品の流通を中心に行っており、その商業の利権で朝廷と対立したのです。そこで、「商売繁盛」のご利益があるというように考えられるのです。

もう一人の三大怨霊の一人が菅原道真です。菅原道真は、その学力と字の美しさで出世し、藤原氏の讒言（ざんげん）でその地位を追われ、大宰府で無念の死を遂げます。そして讒言をした一族やそれを承認した天皇を怨霊で呪い殺してしまいます。さすがに困った朝廷は、菅原道真の生前の家を天満宮として祀り、また、処分を取り消して官位を授けます。この結果は、すでにみなさんがお分かりの通り、現在では「学問」「受験」の神様として、多くの

受験生が天満宮にお参りするのです。

このように、怨霊を祀る場合は、その怨霊を祀ることによってその怨霊が生前に持っていた人並み外れて優れた特性を、そのまま人々に授け「ご利益」とする神となるのです。このように見て行くと、日本の神社の中には、「非業の死を遂げた人」「偉業を成し遂げた人」「不慮の死・事故や天災などで亡くなった人」という三つのカテゴリーによって、「人間」が祀られる神社ができます。「非業の死を遂げた人」ということはすでに例を出したような怨霊が祀られているところです。このほかにも、長野県松本市にある「加助神社」などは、農民一揆をおこした中萱村の元庄屋、多田加助を祀った神社で、現在は「貞享義民記念館（じょうきょうぎみんきねんかん）」となっているが、ここなどは「世の中を安定させる」とか「暮らしが良くなる」といったようなご利益があったとされている。

また、「偉業を成し遂げた人」という意味では、軍神といわれる人々が祀られた神社は、乃木神社や東郷神社が有名であるが、それだけでなく、戦国大名などが地元の鎮守となった「武田神社」や「豊国神社」などもその中の一つと考えられる。

そして「不慮の死や事故や天災」という意味では、東日本大震災の時に話題になった宮城県仙台市若林区の浪分神社があります。慶長三陸地震に伴い発生した大津波のときに当地を襲った津波がこの神社の場所で二つに分かれ、その後、水が引いた場所だと伝わる場所です。このほかにも火山には神社があり、富士山を祀った「浅間神社」や、阿蘇山を祀った「阿蘇神社」などがあります。

このように「事故」「不慮の死」など、一般の民間人ではない末期を迎えると、その時の力をもらい、また、同じような事故を起こさないことを神に祈願する神社になります。あまり海外の人には理解されないのですが、戦死者を祀る「靖国神社」が「平和のための神社」というのは、この発想から出てきている日本特有の死生観から生まれているものなのです。

5 「怨霊が神になる」という逆転の発想は、現代の私たちにも生きている

これら、「怨霊が神になる」というような、あるいは「戦死者が平和の願いになる」というような「逆転の発想」というのは、童話の世界にも表れています。

例えば「桃太郎」です。鬼退治に行きますが、鬼そのものは、殺されたりしません。桃太郎に降参してその後、人間の住む村には手を出さないというように約束してそれで終わります。一寸法師も同じで、鬼を退治した後、打ち出の小槌を含む賠償金を取り上げますが、鬼を殺したりはしません。日本人の中には、そのように鬼を殺すのではなく、そのまま生かしておいて、いつか役に立つというような「共存」の思考があるということになります。

そして、その鬼が「実は人間と仲良くしたかった」というようなストーリーから「泣いた赤鬼」のような童話もできるのです。もともと、怖かったはずの鬼が、いつの間にか人間と仲良くなってしまい、そして人間の役に立つという話は、この他にもいくつかあります。

このようなストーリー展開を、なぜ日本人は受け入れることができたのでしょうか。実は『古事記』の中にその答えが隠されています。『古事記』では、三貴神のうち、天照大御神と速須佐之男命の対立が書かれています。地上を支配したかった速須佐之男命が、天照大御神に様々な嫌がらせをし、そのために天照大御神は天岩戸の奥に隠れてしまいます。神々が集まって一計を案じて天照大御神を天岩戸の奥から出すのですが、さて、この時に速須佐之男命はどうしていたのでしょうか。

速須佐之男命は出雲に降り、肥の河上で、8つの頭と8本の尾を持つ巨大な怪物の八岐大蛇を退治して、その犠牲になろうとしていた奇稲田姫(くしなだひめ)を助けます。そして、その蛇の尾のひとつから草薙剣を得て、天照大御神に献上することによって出雲に残ることを許されます。奇稲田姫と結婚し、須賀に宮を建てて住むようになります。その子孫が大國主命で、日本の支配を任せるようになるのです。

この世に、敵対したにもかかわらず、その相手を許し、そして、その相手に対して有能であれば国の支配を任せるとするのは、古代において日本の特徴的な状況ではないでしょうか。ローマなどは支配地域はすべて奴隷化してしまうのに対して、やはり「黄泉の国」に行って、また戻ってくるというような死生観からすれば、永久に敵であるというような考え方はないのかもしれない。

そこで、「怖い」はずの「鬼」を退治しに行きながら、その鬼を殺さず、いつの間にか仲間になっているという状態です。この考え方が、現代の日本人にも生きているのでしょうか。

現在、JaLSAをはじめとした、日本語学校などで学ぶ多くの外国人は、この室町時代に「鬼」のモデルとなった「異国の入」です。日本人は初めは閉鎖的ですから、心を開かない部分もありますが、いつの間にか「仲間」になってしまうという過程です。この「仲間」になった外国の人は、皆日本に良い印象を持つでしょうし、「鬼」のまま帰国してしまえば日本に対してよい印象は持たなくなってしまう。もちろん、悪いことをした人には「鬼退治」をしなければなりません。同時に「許す」ということも、『古事記』や『日本書紀』、そして、「桃太郎」や「一寸法師」、そして日本の怨霊を祀る神社は、現代の人に教えてくれているのではないのでしょうか。